大関・ワンカップ　東京五輪意識し英語表記

　コップ入り清酒の先駆者といえば大関（兵庫県西宮市）の「ワンカップ」だ。１９６４年１０月１０日、東京五輪開幕に合わせて発売し、累計販売本数は４２億本。今も年間約５０００万本を売り上げるロングセラーだ。

　戦後続いていた統制価格が撤廃され、清酒業界に自由競争の波が押し寄せようとする６０年ごろ。同社は新たな需要を掘り起こすため、当時の長部文治郎社長が、一升瓶ではない「コップ入りの清酒」を提案した。だが、コップ酒は「安酒」のイメージもあり、社内では賛否両論が巻き起こり、なかなかまとまらなかった。

　問題の一つが名前だった。役員の一人は英会話の練習中に思いついた「ワンカップ」にすべきだと主張。長部社長は「日本人ならコップと呼ぶ」と「ワンコップ」がいいと対抗する。そのころ、東京でワンコップスタンドという立ち飲み店が繁盛しており、「ワンコップは安いコップ酒のイメージになる」との意見が説得力を持つようになり、長部社長は折れ、ワンカップに落ち着いた。若年層や東京五輪で訪日する外国人も意識して、英語で表記された。

　発売当時は１８０ミリリットル入り８５円。現在は１００〜３００ミリリットル入りの１１種類（消費税別１００〜２５４円）をそろえる。他社の類似商品はワンカップの呼称は使えない。同社は「ワンカップはカップ酒市場を切り開いた。清酒を手軽に飲める『入門酒』としてもアピールしたい」と話している。【土本匡孝】